

の方が重要である。学芸大附高は大学受験の手段として入ってくる生徒がほとんどであるが、受験指導や補習は行わない。1年生でAを3単位やり3年生で選択でBをとれるようにしてある。能力のある生徒なのでいい刺激を与えるにはどうすればよいかに苦心する。野外実習は1日あてて授業6時間に換算し皇居の外濠一周巡検につれて行っている。

これらの発言に対し参会者から次のような発言や質疑があった。4人単位で自由にグループを組みテーマを与えて1ヶ月の期間で10～30枚程度のレポートを提出させ、提出後すべての生徒に発表させている。地理にあまり関心のない子には系統地理は重複や分断があって理解が困難であり、地誌的なものが入りやすい。授業時間外に地形図の作業をやらせてグループで野外調査をさせる。地理Aには内容に地理でないものが3分の1位含まれている。地図と自然地理と経済地理だけあればよい。また中学と高校の内容に重複が多い。よい副読本がほしい。地理学科卒業生がもっと教員を志望してほしい。

(文責 貝山久子)(1月19日)

## オーストラリア・ニュージーランドの

### 自然と土地利用景観

浅海重夫

日本においてこれまで追求してきた「地形面と土壌型との対応について」の研究テーマを環太平洋地域に広げ、相互の関連性と各地域の特性を考察するために、前年10月～11月に調査したオーストラリア(主として東部)とニュージーランドにおける知見の一部を発表した。

(1) オーストラリア、ニューサウスウェールズ・ヴィクトリア州境のマーレイ川流域一帯の地形面と土壌について。

マーレイ川はオーストラリア大陸の内陸盆地を流れて外洋まで注ぐ唯一最大の水系をもち、東西350kmの範囲に僅々10～20mの比高を保つ平坦な台地面が広がる。流路ぞいに数段の段丘面があり、沖積面の幅はせまく、多くの小支谷は台地を刻む峡谷状をなし、谷壁にバットランド地形の崩壊斜面をみせている。段丘面上の土壌はオーストラリア学派の説くK-サイクル(乾燥期のさく一不安定期一と湿潤期の土壌生成一安定期一の交替)に従った配列をしめし、高位の

Katandra (K<sub>3</sub>) の風化の進んだ重粘質土壌から中位の Quiamong, Widgeelli, May-rung (K<sub>2</sub>) の赤色・黄色土壌をへて下位の Coonambidgal (K<sub>1</sub>) の未成熟型土壌まで階段状に各段丘面に対応される。その配列は極めて明快であり、段丘崖の比高は意外に小さい。概して粘土分の含有量が多く、降雨後の排水をおくらせるので随所に地表水が停滞している。もっともこれはこの年の異常な多雨による特異現象であった。乾燥大陸を初めて訪れて、いきなり異常出水の氾濫ぶりに接した。ただし長い目で見れば、年毎の降水量の変動が大きいことこそが乾燥大陸の正常な自然性であるわけだ。この流域一帯の植物景観は、まれに残る自然植生のユーカリの疎林 (Mallee) とごく一部のポプラの植林地を除けば、すべて人工草原であり、風車をもつ揚水井戸がみられるほかに、マーレー川中流から引水した灌漑用水路がハイウェイに沿ってつくられている。

## (2) ニュージーランド北島中央部の火山地域のテフラと火山灰土壌について。

ニュージーランド北島にはタラボ湖周辺とロトルア地方に火山群があり、北島の中央部に新旧のテフラの累層が分布している。約10万年以上前のハミルトン層から2～1万年前まで(日本の立川ローム層までの各テフラに相当)を古期とし、以降の現在活動中までの降下堆積物を新期テフラとすると、古期のものにおおわれた北西部の台地丘陵地帯には、日本のアンドソイル(火山灰土壌)によく似ているが構造上著しい違いのある土壌 (Yellow brown loam) があって、その生成過程(とくに気候環境の日本との違い)は追求するに値すると思われる。新期テフラ上の土壌は未成熟型で、日本の北海道あたりの新期火山灰土と同じく、埋没腐植層もみとめられる。

その他、オーストラリア、キャンベラ北方のジョージ湖周辺の水位低下、オーストラリア中部アリススプリング付近の地形と植生、ニュージーランド南島のマウントクック周辺の氷河と端堆石地形等について発表した。(3月16日)